



〈本郷キャンパス〉  
学校法人文京学園  
文京学院大学外国語学部・経営学部・  
人間学部・保健医療技術学部／大学院  
／文京学院大学生涯学習センター  
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1  
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816  
文京学院大学文京幼稚園  
〒113-0023 東京都文京区向丘2-4-1  
☎幼 03-3813-3771

〈ふじみ野キャンパス〉  
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部  
／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園  
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196  
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806

〈駒込キャンパス〉  
文京学院大学女子高等学校／文京学院  
大学女子中学校  
〒113-8667 東京都文京区本駒込6-18-3  
☎03-3946-5301

## 大学 長野准教授の共同研究 日本感性工学会大会「優秀発表賞」

人間学部心理学科の長野祐一郎准教授が、株式会社コーセーと共同研究を行い、第22回日本感性工学会大会で同社が受賞した「優秀発表賞」に貢献しました。



長野准教授

長野准教授と株式会社コーセーは、肌とこころの関係を可視化する研究の一環として、化粧品販売におけるストレス反応測定を想定し、心拍数や皮膚温などのストレス評価指標の応用可能性を検討してきました。「皮膚温応答性を用いたストレス耐性評価の試み」アロスタシス理論に基づいた「分析」の研究発表(株式会社コーセー 渡邊梨奈氏による)は、9月9日～11日に長野准教授は、次のようにコメントを寄せました。

「本学で行われたミーティングには、本学学生にも参加してもらい、美容と心理学の未来について積極的な意見交換を行いました。心理学の研究からは、今回のようなストレス科学だけではなく、人間の行動に影響を与える多くの知見が得られています。それらを有効に用いるためには、企業や地域社会と積極的にディスカッションを行い、社会のニーズを正確に知ることが大切だと思います。共同研究活動を通して、心理学を学んだ学生が、その知識やスキルを存分に活かすことのできる社会を創造していきたいと考えています」



泉水さん

## 高校 卒業生が「日本学術振興会特別研究員DC1」に採択

2014年度一貫部理数クラス卒業生(SSH一期生)の泉水彩花さん(高知大学 総合人間自然科学研究科 修士課程 農学専攻 2年)が、日本学術振興会特別研究員DC1に採択されました。これは、学術研究の将来を担う優れた研究に専念する人材を「特別研究員」に採用し、研究奨励金を支給する制度です。泉水さんは博士課程へ進学し、3年間同支援を受けながら自身の研究を進めます。

今回の採択について泉水さんは「何より自分の研究内容に価値があり、その研究を遂行する能力があると公に認められたことが一番うれしかったです。また、自分の研究内容とその魅力を文章で伝えることができたという経験が、今後、研究者として生きていくための自信にも繋がりました」と話しました。

「匂い・味がプリの摂餌行動、食欲および摂餌量に及ぼす影響」をタイトルに、現在行っている研究は「プリに特定の匂い・味を加えた餌を与えると、プリの食欲を増進(亢進)するとされているNPYというペプチドホルモン(タンパク質ホルモン)に変化が見られた」という内容で、プリの養殖などに応用される可能性が高いと期待されています。

研究における苦労・喜びなどについても語ってくれました。「最も苦労することは、プリの飼育です。実験に使えるようプリを健康な状態に維持することに苦労しています。だからこそ思いついた実験方法や研究のアイデアなども多く、飼育すること自体は楽しいので、嫌になることはありません。研究における一番の喜びは、今まで得られたデータが一つに繋がる瞬間です。新たな知見を得られた瞬間は、研究をしていて良かったと心から思え、次の研究へのモチベーションにもなります」

泉水さんは、高校時代に「ノニジュースの摂取効果に関する研究」で、日本水産学会「金賞」を受賞。その他、JSEC・生物オリンピック・出張科学教室などでも大活躍しました。それらの活動は、現在の研究に次のように結びついています。「研究の成果が出なくとも卒業や成績、評価に問題ない自由な状態で、自分の思うままに研究計画を立て、実験を行える環境にあったことは非常に有意義であったと思います。また、JSECなどの研究成果報告会に参加することで、自身の研究の立ち位置や他者からの評価を知ることができました。同年代の優れた生徒たちの発表を聴き、上の世界というものを早くに知ったことで、目標を高くもつという現在の研究姿勢に大きく結びついています」

理数コースの後輩たちには、次のメッセージを贈りました。「私は、人生楽しんだ者が勝ちという信念をもって生きています。自分が心から楽しい、好きだと思えるものならば、その過程で失敗しても、結果が出なくとも、それらは後で必ず役に立つ経験になると考えています。皆さんも何か楽しい!と思えるものを見つけれられたならば、それを突き詰めてみてください」

泉水さんは「現在の研究が、よく食べよく育つ餌の開発に繋がり、日本の養殖漁業に貢献できること」を目標に、さらに研究を深めています。

## 大学 渡部ゼミ日本学生経済ゼミナール 関東部会で「優秀賞」

を考慮してオンライン開催となりました。以下、チームリーダーからのコメントです。



優秀賞を喜び合うメンバー

外国語学部・渡部吉昭教授のゼミナール3年生4名が、チーム「渡部ゼミ」として「第60回日本学生経済ゼミナール関東部会」(主催同部会)のプレゼンテーション部門に出場し、「優秀賞」を獲得しました。出場者は次のメンバーです(敬称略)。

- 須釜莉子(チームリーダー)
- 福田瀬奈
- 土屋仁
- 渡辺ゆみ

同大会は、毎年1000人を超える学生が参加。各大学持ち回りで主催し、今年度は本学が担当。コロナ禍



二見さん

「この大会のために、約9カ月間毎日活動してきました。コロナ禍で思うように活動することができず、何度も壁にぶつかりました。その中で諦めずに活動し続け、また、イベントの際には多くの方が協力してくださったお陰で優秀賞獲得に繋がったと思います。この経験を通して、取材やイベントを行う上での段取り、チーム作業において個々が力を発揮できる空気作りの大切さを学ぶことができました。これを今後の学生生活、そして就職活動にも活かしていきます」

また、今回の大会で運営事務局として活躍した経営学部3年生5名(二見悠斗、安藤佳奈、永井愛実、飯田夏海、佐野浩平)の学生のうち2名からコメントが届きました(敬称略)。

- 二見悠斗(同大会実行委員長)「内容も素晴らしいものばかりで非常にうれしく、安堵しています。開催できたのは、討論部門の永井さんとプレゼン部門の安藤さん、2人の力が大きかったです。私自身も大きな大会の運営に携わる機会をいただけたことに感謝しております」

## 保健医療技術学部 川良徳弘



理由であったと思います。前期の病院実習が学内実習に置き換えられたのは、やむを得ない対応でした。国がそれを認めたのは、それだけ新型コロナウイルス感染症の影響が大きかったからといえます。

本学部は病院実習を始め国家試験受験資格に関わる科目が多い、学年制に近いカリキュラム編成をとっています。そこで、学生が新型コロナウイルスに感染せずに、かつ本年度の学修が行われる方策をたてることが課題となりました。幸い、大学全体を取り組みで5月からオンライン授業を開始され、知識習得科目は年度内遂行の目的が立ちました。問題は、普段なら対面で行っていた実習科目でした。特に病院実習は医療者、患者、そして学生に感染リスクが発生するため、ハイドルの高い状況となっていました。

## コロナ禍における保健医療技術学部の学び

## Green Spirits

まず、大学内での実習・演習は6月中旬に始まり、看護学部でもと病棟の院内感染対策を担うためのトレーニングが実習に組み込まれていました。体温測定を含む健康チェック、手洗い、手指消毒などの感染予防対策が当たり前に行われていました。これらの方法を共有することができたのは学部としては幸運でした。国家資格に関わる科目が多いこと、医療従事者を目指す学生に対する信頼が、対面授業再開の先陣を託された



# 大学「おなご先生100人養成達成」に寄せて

本学名誉教授の山下季子先生（特定非営利活動法人日本ネパール女性教育協会理事長）が、長年取り組んでこられた「ネパール山村での女性教育育成」活動における育成者数が100人を達成しました。それを記念して、その軌跡を綴った記念誌『ネパール山村に100人の「おなご先生」養成の記録』を出版。山下先生から次の寄稿をいただきました。

## ネパール山村のおなご先生100人養成

それは、1991年、文京女子大学経営学部が、前年14年間、延べ250人の文京生が、村の女性たちの調査をし、ネパールを体験しました。私の「国際女性学セミナー」（通称「ネパールゼミ」）では、毎年、ネパールの山村でテント暮らしを

せてもらえなかったのです。2004年、文京学園創立80周年に、学生と社会人のコラボレーションで、「NPO法人・日本ネパール女性教育協会」を設立。目的は、村の学校の「おなご先生」を育て、少女たちが学校に行きやすくなることです。ネパール第2の都市・ポカラの女子大の協力をえて「さくら寮」を建設し、最奥の村々から1年に10人を選抜し、10年間100人の少女に教職教育を行いました。そして、卒業後、3年間は必ず先生をしてもらう約束をしました。

「さくら寮」のモットーは、「豊かな人間性を育む教育」です。日本から専門家を派遣して、ネパールの学校教育に欠けている情操教育、表現教育、保健体育、人権教育などをしました。なかでも、文京でも長く教えてくださった古宇田亮順先生のパネリアターは、一番の人氣で、いまも村の学校で盛んに活用されています。



「さくら寮」設立10周年記念で

記念誌



ネパールに100人の「おなご先生」養成の記録



ネパールの衣装をまとう山下先生



新美術部の部員たち（撮影時のみマスクなし）

## 中高新たな「美術部」紹介

これまで「CIP部」「イラスト部」「美術部」として活躍してきた3部活動が一つになり、今年4月から「美術部」に編成。何よりも「自由」を重んじる部活として人気を誇り、現在、中学生7名、高校生25名が所属しています。部を円滑に運営するため、3部門3部長制を採用しています。各部長は次のように想いを話しました。

●平田彩香さん（2楓・美術部）「コロナ禍で多くのことが変わる中、『文芸祭』も展示形式になり、私たちに何ができるかを考えながら、それぞれ作品制作に打ち込み、充実した時間を過ごしました」

●森下月鼓さん（2楓・CIP部）「自立した部員ばかりなので、部長だからと気負うこともなく、部としての決まり事も必要があればみんなで決めればよいと考えていますから、とても安心して楽しんでいます」

●前CIP部が担当の学園紙の「tomoちゃん」は、前CIP部が担当

## 高校「英語スピーチコンテスト」

### 高度な英語力で



入賞者を祝って（撮影時のみマスクなし）

「第48回英語スピーチコンテスト」が11月18日、駒込キャンパス・ジャシーホールで開催されました。新型コロナの感染防止対策のため、ホールには高2のみがソーシャルディスタンスを取って着席。高1は教室でモニター視聴しました。司会は、2藤の市原真央さん、名取めえさん、マホメッド・シュミラさん。暗唱部門6名、スピーチ部門6名が高度な英語力で奮戦した結果、次の生徒が入賞。暗唱部門では、3位に2名が入賞しました（敬称略）。

【暗唱部門】 ●1位=金野千紘（1檜） ●2位=長岡里桜（1楓） ●3位=カーン紗奈（1藤）、杉谷遥華（1杉）

【スピーチ部門】 ●1位=加藤真尋（2梅） ●2位=倉石菜名（1楓） ●3位=山口莉央（2楓）。加藤さんは「島田賞」も受賞。審査員は、本校と教育連携を結ぶアオバジャパン・インターナショナルスクール校長のMr.Ken Sell、外部審査員のMs.Tan Bee Bee Swissy、本校講師のMr.Allan Nisbet。発表は松崎毅国際文化センター副センター長・教諭が行い、清水直樹高等部校長、島田昌和理事長から入賞者に賞状と盾が贈られました。表彰式に続き、3審査員からの講評があり、審査に難航した様子と、スピーチのコツなどが語られました。最後に、清水校長が閉会挨拶を行い、白熱のコンテストを終了しました。

## 幼稚園 学年別運動会で園児大活躍

新型コロナウイルスを配慮した「学年別運動会」が、ふじみ野幼稚園（小栗後之園長）と文京幼稚園（益田薫子園長）の園庭で開催されました。どの学年も持てる力をフルに発揮し、大きく成長した姿を来場者に見せることができました。

### ふじみ野幼稚園（10月11日）

- 「年少組」「身体を動かすことを楽しむ」ことをねらい、次の種目に取り組みました。
- 「年中組」「友だちや保育者と一緒に運動会を行うこと」をねらい、「思い切り体を動かすことを楽しむ」をねらい、次の種目に取り組みました。
- 「親子で玉入れ対決！」
- 「まわせ！カウボーイ・カウガール！」（リズム）
- 「みんなでかけっこ」
- 「年少組」幼稚園に入園して初めての運動会。ドキドキしながらも、クラス毎に並んで入場。始めの体操も元気いっぱい。次の種目にも挑戦しました。
- 「年中組」子どもたちが元気に入場行進し、「始めの体操！スポーツだいきー！」を元気いっばいに披露。次の種目にも挑戦しました。
- 「体操「ゴールをめざせ」



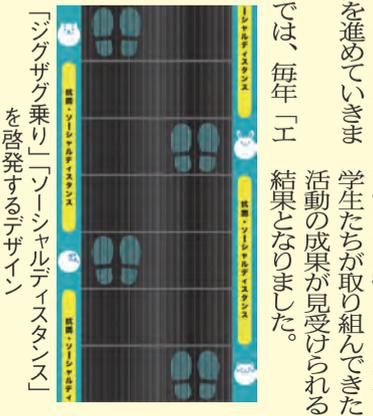
年長組が披露したパラバルーンの演技（写真提供=スタジオトナミ）

## 大学 活動4年目は「ジグザグ乗り」を提案

経営学部マーケティング戦略研究の新田都志子ゼミナールでは、2017年度より「エスカレーター安全利用啓発活動」に取り組んでいます。誰もがエスカレーターに立ち止まって乗る社会の実現に向けて「手すりにつかまろう」（2017年度）「止まって乗ろう」（2018年度）「2列で乗車しよう」（2019年度）の3段階を踏まえ、それに合わせたデザインを提案してきました。今年度は、新田ゼミの3年生5人が同活動を継承し、コロナ禍の新しい生活様式に相応しい乗り方を研究しています。感染症専門

家である保健医療技術学部臨床検査学科の古谷信彦教授からのアドバイスを参考に、他の利用者との間隔を空け、密を避ける「ジグザグ乗り」を提案。手すりには、ソーシャルディスタンスを誘導するデザインも考案しました。

新田ゼミでは、毎年「エスカレーター」の安全利用に関する調査も実施。2018年と2020年の調査結果を比較すると「片側空けは常識だと思つ」が74%から54.3%に減少。学生たちが取り組んできた活動の成果が見受けられる結果となりました。



「ジグザグ乗り」を啓発するデザイン